

思考停止再論

オウムの信徒は「思考停止」して違法行為をするといわれています。ここでいう思考停止は、「指示の目的・結果を考えない」ことです。

しかし、信徒が思考停止様の思考をするのは事実ですが、指示されれば必ず思考停止するというわけではありません。思考停止には起る条件があるのです。それにもかかわらず、信徒の思考様式が論じられる場合、この条件が考慮されておらず、必ず思考停止するかのような論調が目立ちます。

その結果、オウムが事件を起こした動機・目的の解明が阻害される事態が生じました。たとえば、指示の目的を聞いているのにもかかわらず、その目的を明確に供述しない元信徒が出てきました。また、私が事件の動機・目的を供述したところ、指示の目的を考えるのは信徒の思考パターンではないかのように元信徒の弁護士が指摘し、私が不利になるように裁判官をミスリードしたこともありました。これではオウム、あるいは自分自身が事件を起こした動機・目的が供述しにくくなります。

このような問題が起こらないように、思考停止について再度論じさせていただきます。

オウムにおける私の経験に照らしますと、一般にいわれている信徒の思考停止には誤解が多々あり、事実は恐らく次のとおりでしょう。

(1)麻原の指導は、第一義的には、信徒を思考停止状態にして指示に従わせるものではなかった。指示に従うことを促す教義を連想（想起）させるものだった。

(2)信徒が思考停止して指示に従うのは、指示に反する思考が喚起された場合、つまり、信徒が思考停止して違法行為をするのは、入信前に一般社会において形成された規範意識などが喚起された場合。

(3)麻原は信徒に違法行為をさせることに目的を特化した指導をしたことがあった。それはヴァジラヤーナの教義を受容させるものだった。その指導を受けた信徒は、思考停止せずに、ヴァジラヤーナの教義が連想されて違法行為をした。

一般的には、麻原は信徒に解脱・悟りを得させるといふ名目で指示に絶対的に従わせる指導をした。その指導のみを受けていた場合、信徒は思考停止して違法行為をした。

心理学の知見によると、人は何らかの指示を受けた場合、その指示に関連することが「自動的」に連想（想起）される。だから、指示の目的や結果なども、意識的に考えなくても、関連する何らかのことが連想されてしまうケースが多い。

違法行為の指示を受けた場合、違法行為のための指導を受けた信徒は、ヴァジラヤ

ーナの教義が連想される。違法行為が、ヴァジラヤーナの教義に基づく救済として意味付けられているからだ。

他方、一般的な指導しか受けていない信徒は、一般社会の人が違法行為について考えることが連想される。違法行為の意味付けそのものは変えられておらず、一般社会の人と同じだからだ。連想されたことは指示に従うにあたり障害となるから、これを意識しないようにするのが思考停止。

(4)「オウムの信徒は思考停止して違法行為をする」という見方がされるのは、確かに思考停止様の思考をしていた信徒が多かったからかもしれない。しかし、それは違法行為のための指導を受けなかった信徒が多かったことによる。つまり、麻原が全出家者にヴァジラヤーナの教義を説き、この教義が受容されやすい環境が実現されていたのは、平成元年四月から翌二年三月の間のみだった。

また、裁判の過程で弁護士からカルトのメンバーの「思考停止」のことを知らされ、それに沿った証言をする信徒がいたことも無視できない。

以上の点について、詳細に説明させていただきたく思います。

(1)麻原の指導は、第一義的には、信徒を思考停止に導くものではありませんでした。最も基本的な指導は、教義を繰り返し学ばせ、日常生活における様ざまな状況に対応した教義が連想されるようにするものでした。そのために、信徒は教義に則った判断をする傾向がありました。

このような教学の効果は、心理学においても実験によって確認されており、西田公昭立正大学教授が指摘されています。

教義が連想され、信徒が教団からの指示に従う例を説明します。日常的には、信徒は思考停止することはむしろ稀だったのです。

しばしば、教団は在家信徒にイニシエーション（秘儀伝授）を受けするように強く勧めていましたが、これはかなり高額でした。たとえば、瞑想法の伝授と麻原のDNAの撰取という内容のイニシエーションは三十万円でした。この内容と金額を聞けば、非信徒の方ならば「詐欺ではないか」と疑うでしょう。

しかし、借金をしてまでもイニシエーションを受けると、信徒が少なくなかったのです。「イニシエーション」と聞けば、「尊師がカルマ（苦界に転生する原因）を浄化してください」という教義が連想されるからです。教義によると、カルマが浄化されれば苦界への転生から解放され、加えて解脱にも近づけます。このように意味付けられていたので、イニシエーションは信徒にとっては無上の価値があったのです。

イニシエーションを勧められたとき、多くの信徒は思考停止せず、教義が連想されて従ったはずですが、信徒はイニシエーションの目的（カルマの浄化）に関する教義を受容し、その結果が生じることを期待する会話をしていたのです。

ここで重要なのは、信徒は「イニシエーション」を意味付ける教義が連想されるから、非信徒の方とは異なり、「詐欺」という考えが喚起されないということなのです。

違法行為の場合も事情は同じです。違法行為を宗教的に意味付けるヴァジラヤーナの教義を麻原は繰り返し説いていました。この教義が違法行為を指示されたときに連想されるから、信徒は一般社会の人のような思考が喚起されないのです。もちろん、教義が十分に受容され、入信前に一般社会において形成された違法行為についての意味付けが無意味化されている必要はありません。

(2) 信徒が思考停止せずに指示に従う場合があるならば、思考停止が起こる条件を明らかにする必要がありますでしょう。

西田教授によると、いわゆる「思考停止」は次のような状態です。すなわち、カルトによるマインド・コントロールの影響下にある会員は、カルト側が指示した課題達成の枠内では自由な思考が自発的に働きますが、指示を越えたり、指示に反する思考に及んだりしようとすると、途端に強烈な恐怖感が生じ、自由な思考が停止します。そのために、仮に良心の呵責に触れたり、教義に矛盾していると感じたりしてもカルト側の指示は正しいことである、あるいは救済であるなどと自己説得して、課題達成のみに思考を集中させようとしています。

また「思考停止」は、カルトに関して疑うことを拒む防御反応でもあります。『「青春を奪った統一協会」 青春を返せ裁判（東京）原告団・弁護士編著 緑風出版』

つまり、カルトの会員が思考停止するのは、カルト側の指示に反する思考やカルトに関する疑問が生じた場合です。たとえば、銃で人を撃つと指示されたカルトの会員は、指示に反する思考が生じた場合、人を殺傷するという結果を考えないようにして従うのです。ですから指示に反する思考が生じなければ、信徒は違法行為の指示にも思考停止せず、目的・結果を考えて従っていました。

なお、麻原は指示の目的・結果を考えることを禁じてはいませんでした。たとえば、平成六年六月の省庁制発足と同時に、次の内容を含む詞章『決意』を信徒に配布しました。

「タントラ・ヴァジラヤーナは、結果の道である。したがって、結果のためには手段を選ぶ必要はない」

これは、三悪趣に転生する人の救済という結果のためには、違法行為という手段も

肯定されるという意味です。このように言われれば、信徒は違法行為の指示の目的・結果を考えることが促されることはあっても、抑制されることはないでしょう。

むしろ、麻原は信徒に指示の目的・結果を考えるように指導していたのです。たとえば平成四年十一月に、私どもに次の内容を含む詞章『十一月特別決意』を唱えさせました。

「グルはわたしに対して、多くの課題を与える（中略）目的をしつかりとらえ、その目的を記憶修習するんだ 達成の状態をしつかりと考え、そのデータを記憶修習するんだ（中略）次に、目的に至るまでの設計図をしつかりと何度も何度も記憶修習するぞ あるいはできあがったものに対して徹底的に分析を加え、完成の状態を記憶修習するぞ 徹底的に思索によって完成の状態を記憶修習するぞ つまり自分自身が考えた設計図がそのとおり使われるかどうか、そのとおりの結果を出すかどうかを、しつかりと思索によってチェックするぞ」

これが麻原の指導でしたから通常は、信徒は指示の目的・結果を考えていました。

(3)麻原はオウムの初期の頃から、信徒に解脱・悟りを得させるという名目で指示に絶対的に従わせる指導をしてきました。その指導に加え、信徒に違法行為をさせる目的で、平成元年四月から違法行為を宗教的に意味付けるヴァジラヤーナ（の救済）の教義を説き始めたのです（手記第三章第一節）。

ここで、なぜ麻原はヴァジラヤーナを説いたのでしょうか。指示に絶対的に従わせる指導だけで十分ではないでしょうか。当時はオウムの過激な出家制度が問題になり始めた頃であり、さらにヴァジラヤーナを説いていることが外部に漏れたら一大事になる状況でした。実際、ヴァジラヤーナの教えは口外しないように、麻原の側近が各部署を回って指示していました。このような危険を冒してまで説く必要があったのでしょうか。

実は、指示に絶対的に従わせる指導だけでは、違法行為をさせるには不十分なので、私は違法行為を指示された信徒を六十人以上見てきましたが、ヴァジラヤーナを説かれなかった信徒は、かなりの困惑や抵抗を示すケースがありました。指示に対する疑問を口にすることさえあったのです。これは、オウムの出家者の常識からは考えられない行為でした。

また、私は平成六年からは、信徒に教団の武装化を指示する立場にもなりました。彼らにほとんどはヴァジラヤーナを説かれていませんでした。彼らのうち何人かは違法行為をすることについて、「やだな」、あるいは「ショックだ」、「聞かなければよかった」などと話していました。たとえば、彼らには何を製造しているのか教えず、それが分かったとしても互いに話さないように指示しました。また、彼らの報告書を毎日チェックし、心理状態の把握に努めていたのです。

このような経験をすれば、麻原が敢えてヴァジラヤーナを説いた理由が理解できません。麻原はヴァジラヤーナを説かずに逸脱行為ないしは違法行為を指示したときに、信徒の動揺を感じたのでしよう。

ヴァジラヤーナの説法は実際に、効果があったようです。猛毒のボツリヌス・トキシンを世界中に散布する計画（手記第四章第一節）は、ヴァジラヤーナが説かれていた最中の平成二年三月頃から動き出したのですが、この計画に関与した信徒には動揺は見られませんでした。失敗続きで計画が進まないことを憂える声は聞かれましたが、このグループは、後の時期に違法行為を指示された信徒と比較して、最もスムーズに違法行為に移行していきました。

このヴァジラヤーナの説法の効果は、心理学で明らかにされている人の心の性質からも説明できます。

まず、人は何らかの刺激が与えられた場合、その刺激に関連する記憶が連想・活性化（利用可能な状態になること）されます。そして、その連想が広がっていくのです。（心理学でいう「活性化拡散」）

たとえば、目の前の釜にお湯が沸騰している状況で、「その中に手を突っこめ」と指示されたら、その結果は直ちに連想されるでしょう。この連想は、意識的に考えなくても、「自動的」に起こると考えられています。熱いものに触れたときの苦痛の経験から、その行為と結果の連想が結びつきが極めて強いからです。

違法行為を指示されたときに起こることも同じです。信徒が人を銃で撃つと支持された場合、人を殺傷する結果になることは、自動的に連想されてしまうでしょう。加えて、人を殺傷することについて一般社会の人が考えることも連想されたならば、思考停止して従うことになります。連想されたことが、指示に従うにあたり障害になるからです。

その指示に思考停止して従うことは、連想された結果を意識の外に追いやりつつ、沸騰したお湯の中に手を突っこむことと似ています。人を殺傷することも、熱いものに触れることも、それまでの経験によって、禁止されるべき行為として記憶、かつ条件付けされている点で同類だからです。

これは信徒にとって、かなり厳しい状況です。この状況を回避するには、人を殺傷するということから連想されることを変えるしかありません。指示されれば、関連する何らかのことが「自動的」に必ず連想され、その連想が広がっていくからです。

そこで、ヴァジラヤーナの教義が必要になります。この教義によって、人を殺傷することの意味付けが改められれば、「救済」、「なすべき行為」ということが連想され、一般社会の人が考えることは実質的に連想されなくなるからです。

そのようにヴァジラヤーナの教義を受容した信徒は、違法行為の指示にも思考停止せずに従っていました。連想されることが、指示に従うことを妨げず、むしろ促すからです。

付言致しますと、麻原の指示に絶対的に従う指導や恐怖による思考・行動の支配がいかに完璧になされても、それだけでは、違法行為を指示された場合に連想されることは一般社会の人と変わりありません。これらの指導は、違法行為の意味付けそのものは変えないからです。一般社会の人が考えることと、麻原の指示は絶対という教えの両方が連想されるので、前者を考えないようにして（思考停止して）指示に従うこととなります。

以上のように、信徒に違法行為を無理なくさせるためには、その目的のための指導が必要だったのです。実際の指導としては、麻原は信徒にヴァジラヤーナを説くだけでなく、その教義に則って軽度の逸脱行為も指示しました。信徒は一般社会において社会規範に従うように条件付けられていたので、この条件付けを解除しないと違法行為はできません。その解除のために、逸脱行為の指示に従う新たな条件付けを施したのです。ここで軽度の逸脱行為を指示したのは、いきなり重大な違法行為を指示すると抵抗が大きくなるからです。その後、麻原は程度を次第に高めながら逸脱行為ないしは違法行為の指示を繰り返し、最終的には殺人を指示しました。

このようにヴァジラヤーナの実践を繰り返す過程で、信徒はヴァジラヤーナの信念が強化されます。信念は行動と一致するように変化するからです（心理学でいう「自己知覚理論」、「認知的不協和理論」）。心理学では、強い信念は連想されやすい信念とみなされています。ですから、ヴァジラヤーナの実践を繰り返させる指導も、その教義を連想させやすくするものでした。

この麻原の指導についても、西田教授が指摘されています。

なお、私の経験では、初期の逸脱行為の指示は思考停止の必要がないほど軽度のものでした。ですから程度を次第に高めながら一連の逸脱行為ないしは違法行為を指示される過程において、信徒は一貫して思考停止はせず、ヴァジラヤーナの教義を連想するはずで。

前述のように、私が違法行為の目的を「ヴァジラヤーナの救済」と供述したところ、指示の目的を具体的に考えるのは信徒の思考パターンではないかのように元信徒の弁護人が指摘しました。この指摘が失当であることは、以上の説明から理解していただけると思います。

まず、違法行為の指示の目的を「ヴァジラヤーナの救済」であると考えさせる（正確には、連想させる）のが、麻原の指導でした。また、そのように考えていなければ、一般社会において形成された強固な連想の結合は断ち切られておらず、一般社会の人と同じことが連想されるはずで。この心理状態にあるほうが当然、信徒は違法行為の指示に従うのを厳しく感じるでしょう。

(4)平成元年四月から翌二年三月頃まで、麻原は全出家者に向けてヴァジラヤーナ（の

救済)の教義を説きました。この期間は加えて、麻原が出家者に軽度のヴァジラヤーナの実践を指示することも多かったのです。たとえば、麻原は教団の活動が妨害されたと判断するや、出家者に強迫的な方法による抗議をさせました。また、選挙活動もヴァジラヤーナ的でした。麻原への投票を呼びかける声をサブリミナル的に潜ませた音楽テープを一部の有権者に配布する(その後、サブリミナル効果の存在は否定されました)、対立候補のポスターを破る、投票日に選挙区の全世帯に麻原の似顔絵と名前が印刷された風船などを配布するなどの行為を麻原は出家者に指示したのです。ですから当時の出家者は、ヴァジラヤーナの信念が強化されたり、その実践が条件付けされたりする状況にありました。

実際、当時の出家者はヴァジラヤーナの教義を一定程度は受容していたようです。たとえば平成元年四月二五日の説法において、麻原が「末法の世の救済を考えるならば、少なくとも一部の人間はどうだ！ヴァジラヤーナの道を歩かなければ、真理の流布はできないと思わないのか！」と問いかけたところ、出家者一同は「はい！」と応じました。この質問の熱気を、今も私は覚えています。また、私と同じく科学班に所属していた出家者は、ボツリヌス・トキシン散布計画に参与した動機がヴァジラヤーナの教義にあったことを陳述しています。

同計画からオウムの武装化が始まりましたが、兵器の製造に日常的に携わっていた出家者にとつては、ヴァジラヤーナの教義は日常の行動規範になりました。一方、所属部署や麻原との関係によって、ヴァジラヤーナの実践を指示される程度の差は大きく、指示されなかった出家者にとつては、その教義は単なる「お話」だった可能性もあります。

麻原は武装化を開始した平成二年四月以降、全出家者に向けてヴァジラヤーナの教義を説かなくなりました。その理由は聞いていないので推測になりますが、ボツリヌス・トキシン散布計画を契機にヴァジラヤーナ要員を決めたので、さしあたり、全出家者を教育する必要がなくなったのでしょう。必要がなければ、リスクを伴う説法をやめるのは当然です。

この理由で、平成二年四月以降に出家した信徒については、違法行為のための指導を受けずに、いきなり重大な違法行為を指示されるケースがありました。このような信徒は、前述のように思考停止様の思考をして指示に従ったのかもしれない。このケースが多いために、「オウムの信徒は思考停止して違法行為をする」という印象を与えているでしょう。

なお、ヴァジラヤーナの教義をあまり知らなかった信徒も、無差別大量殺人につながる指示に従っていました(その当時は、薬物を使用したイニシエーションも始まっています)。違法行為を指示されて最終的に従わなかった信徒を私は知りません。

ただし次の理由から、信徒の多くを違法行為に参与させるためには、ヴァジラヤー

ナの教義が必要だったと思われます。まず、この教えを受けていない信徒は違法行為をするにあたり、かなりの抵抗を示す場合が多々ありました。また、そのような新人は、「麻原の指示は絶対」という教え以外にも、指示に従うに至る要因がありました。彼らの周囲では、既にヴァジラーナの実践に慣れた地位の高い先達たちが確固たる信念をもって、当然のことのように違法行為をしていたのです。ですから新人は、先達に合わせて同じ行為をせざるを得ない状況にありました。周囲の信徒の多くが動揺している状況であれば、挫折者が出た可能性は否定できません。

抵抗を示していた新人も、半年も違法活動に従事すれば、かなり慣れた様子が見受けられました。その状態になれば、思考停止の必要はなくなるはずですが、何が連想されても、慣れによって、それが違法行為をする妨げにならなくなるはずだからです。ですから実際は、最終的には思考停止しないで違法行為をしていた信徒が多かったのではないのでしょうか。思考停止様の思考をして事件に関与したと供述した信徒は、それが事実ならば、事件当時も違法行為に慣れていなかったことになります。

補足致しますと、麻原は省庁制を発足させた平成六年六月に、ヴァジラーナの教義を含む詞章を全出家者に配布しました。またその頃、ヴァジラーナに関する過去の説法を初めて活字化し、『ヴァジラーナコース教学システム教本』として全出家者と一部の在家信徒に配布しました。その前に麻原は「兵士を一人作る」と言っていたので、多くの信徒に違法行為をさせるための指導を始めようとしたのでしよう。しかし、平成五年から六年に教団の武装化に関与し始めた信徒の多くは、自分の行為をヴァジラーナの教義に結びつけて考えることはなかったようです。麻原は説法集を配布しただけであり、全出家者に向けてヴァジラーナを新たに説くことさえしなかったため、教育的効果はほとんどなかったのでしょうか。

省庁制発足直後の頃の最優先の修行は、『ヴァジラーナ決意』という詞章を唱えることでした。この詞章は在家信徒と兼用であり、違法行為は促しておらず、「この世の中は三悪趣のデータでできている したがって、この世の中で普通に生活しているだけで三悪趣に落ちてしまう」などの内容を含みました。これはヴァジラーナの救済の前提なので（手記第三章第一節）、この教えを徹底させてから本題の説法を考えるべきだったのかもしれませんが、いきなり過激な説法をするのが、はばかられたのでしょうか。平成二年四月から在家信徒を無差別に出家させるようになったために、教義が根付いていない出家者もいたからです。

オウムの信徒は「深い意味がある」などと考えて思考停止するといわれていますが、この言葉は統一協会会員の思考停止のキーワードとして指摘されています（手記第三章第二節）。（元）信徒が思考停止に関する情報に触れたために、その影響を受けた話をしている可能性を考慮する必要がありますでしょう。

その確認をするために平成二十一年八月から九月にかけて、私はアレフの現役出家

者に次の質問をしました。

教祖が事件を指示した目的についてどのように思いますか。

- (1) 信徒に対するマホームドラー
- (2) ヴァジラヤーナの（教義に基づく）救済
- (3) 指示には深い意味がある
- (4) その他（具体的に）

三人から次の回答（要約）を得ましたが、よくいわれる思考停止とは異なることを理解していただけだと思います。

（A氏）94年春頃は、毒ガスのようなものはまかれていたのだろうと信じている。これが前提。それに対して防御の意味も込めて、サンプルとして、ごく少量のサリンやイペリット等を教団で作ったのだろう。松本サリン事件に関しては、なぜ起こしたのか全く分からない。サンプルとして作成したガスの効力を確かめたかっただけなのかもしれない。95年1月1日の読売の報道以降は、教団もだんだん追いつめられていく。その中で、假谷さん拉致事件が起きてしまう。当時の思想の影響で、ヴァジラヤーナの救済だから何をしてもいいという思考に陥っていたのだろう。事件が発覚するが、逮捕は避けられないと教祖は判断したのだろう。当然、それまでの事件が白日の下にさらされ、死刑も避けられないと判断したのだろう。そこで、大きな事件を起こせるだけ起こして裁判を長期化させ、死刑判決を遅らせる意図で地下鉄サリン事件を実行したのではないか。

（B氏）(1)、(2)、(3)に加えて(4) 尊師ご自身は、自分はどうしたい、こうしたいという意思はなく、弟子の修行が進むならば、どうなろうと構わないと思っている。弟子の潜在意識にあるものが現象化されたのが事件。

（C氏）(3)と(4) 日本人の悪業のカルマがたまりすぎて本当はもっと多くの方が亡くなられる状態だったのを最小限にカルマの清算をされたのかと思っている。または伝達がうまく行き届いていなかった。未来が見える一般の方々も以前は焼け野原が見えるといっていたそうだが今は見えないとしばらく前に聞いた。神々たちは悪業によって磁場が狂ってくると災害を起こしその磁場を正常にするとも聞いた。それはいろいろ計算したり地形をはかったりしてできるだけ最小限で起きるようにしていたと過去世をご覧になっていた師がおっしゃっていた。そんなこともあって凡夫ではわからない何か深い意味合いがあったのではないかと思う。

補足致しますと、C氏は(2)を選択していませんが、「カルマの清算」はヴァジラヤーナの救済の教義に含まれます（手記第三章第一節）。ヴァジラヤーナの教義については、現在アレフでは封印されているので、C氏は詳しく知らないのでしょうか。それ

でも信徒においては、事件が明らかになって以来、ヴァジラヤーナの教えの残滓やそのほかの教義によつて事件の意味付けがなされたようです。

以上の回答のように、三人は事件について教義に則つて考えています。つまり、三人は事件について思考停止をしているというより、一般社会の人が連想する規範などが無意味化され（無意味化されていなかったら脱会しているでしょう）、教義が連想される状態にあるようです。これは、私がオウムで見てきた信徒の状態でもあります。ですから私は、（元）信徒が話す思考停止様の思考については、思考停止に関する情報に触れたことによるバイアスがかかっているように感じることもあるのです。

（完）